



ウクライナ国日本大使館による「草の根無償支援プログラム」

「移住者村診療所支援プロジェクト」

交付決定(約 825 万円)!!



〈在ウクライナ 日本大使館における署名式〉

2004年6月25日、ウクライナの日本大使館で「草の根無償支援プログラム（日本国外務省主催）」の交付金贈与契約署名式が行われました。今回の交付対象は、「チェルノブイリ救援・中部」とジトーミルの「チェルノブイリの人質たち(ホステージ)基金」が申請した『移住者村診療所支援プロジェクト』の他、『キエフ市第1小児外来病院支援プロジェクト』（プリピャチからの疎開者団体「ゼムリヤキ」と広島市の「ジュノ

一の会」が申請）など、全部で4つのプロジェクトとなりました。これらはすべて、ウクライナ国の団体が主人公となり、彼等の手で実施されるプロジェクトです。「ウクライナの人達による自主的な活動」のはじまりとして、象徴的な出来事であると言ってもよいでしょう。

署名式と記者会見の後、大使及びキリチャンスキー氏と話したところによれば、2ヶ月以内に機器の搬入が終わり、その後、村の診療所の一つで、大使立会いのもと「引渡し式」が行われる手はずになっているそうです。9月に予定されているチェル救代表団は、すでに搬入された機器を、現地で確認することができることになるでしょう。(P6~P7 参照) (竹内高明)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

総会およびチェルノデーのご報告

去る6月12日、NPO交流プラザにおいて「定時総会」が開催され、この1年間のチェル救の活動報告、および、これからの1年間の活動方針に対して、皆様のご承認をいただくことができました。

「チェル救デー」の企画としては、今年2月に訪問した、小牧さん・石川さん・北野さんの報告を聞いていただきました。新しい支援先のサナトリウムで、早速、宿泊を体験した訪問団メンバーによれば、とても快適な保養所に改築され、今後が楽しみとのことです。

今回は、ジトームルで開かれた「子どもの目から見たチェルノバイリ」絵画展の優秀作品を取り寄せ、展示しました。事故後18年経っているとは思えないほど、生々しく迫力のある絵に、参加者は見入っていらっしやいました。テレビ局も取材に来たのですが、残念ながら放映はされませんでした。

「NPOとして、公正かつ安定した運営を保っている」とご信頼いただいているせいか、総会の出席者はけっして多くはありませんが、それでも毎年、会員の方、また支援者の方々と交流する場を、今後も大切にしていきたいと思えます。



「チェルノバイリの母子支援募金(カタログハウス)」から 「ナロジチ病院」「ブルシロフ病院」に120万円の助成金が交付されました!!

カタログハウス社が『通販生活』誌上で行っている「チェルノバイリの母子支援募金」に対して、ナロジチ病院とブルシロフ病院の医薬品購入費の助成を申請し、満額の120万円が交付されました。金額は、それぞれ60万円ずつです。「チェルノバイリの母子支援募金」からは、昨年度も医薬品購入費の助成をいただいています。

ナロジチ病院は、汚染地帯のなかにあり、地区住民全員が被災者ということが出来ます。ブルシロフ病院は、汚染地のそとにありますが、この地区には汚染地からの移住者が多数住んでいます。チェルノバイリ事故被災者の圧倒的多数は、ただちに致命的ではありませんが、経年的に進行し、徐々に身体を蝕んでいく多種多様な疾病・傷害に苦しめられています。このような被災者を、それぞれの生活の場において、医療面でケアすることは、被災者医療支援の重要な一領域と考えられます。それを中心的に担っているのが、ナロジチ病院・ブルシロフ病院などの地区病院です。

チェル救は、今年度すでに、自己資金でナロジチ病院に25万円、ブルシロフ病院に35万円の支援を行っています。「チェルノバイリの母子支援募金」への交付金を加えると、ナロジチ病院には85万円、ブルシロフ病院には95万円の支援をすることができます。今年度(04年度)の行政予算から支出される1年間の医薬品・医療消耗品費は、ナロジチ病院で約44万円分、ブルシロフ病院で約140万円分ですから、チェル救からの支援は、両病院にとって大きな意義をもつことになるでしょう。(田中)

絵画展を開きませんか？

前号でもお伝えしましたが、「こどもの目で見たチェルノブイリ」展に出品された41枚の絵が、今、救援・中部の事務所にあります。

どれをとっても、私達の胸を打つ素晴らしい出来栄で、このままウクライナに返してしまうのはもったいないのです。

そこで、この記事を見た人の中で、「私のところで展覧会を開いてみたい」と思われる人のもとへこの絵をお届けして、展覧会を開いてもらおうというアイデアが持ち上がりました。救援・中部では、これらの絵のひとつひとつを額縁におさめ、希望者の



アレクサンドル・ゴメンコ(15才)
「チェルノブイリの汚染地域」

ところへ送り出す準備を済ませていきます。

ぜひこの機会に、これらの絵の素晴らしさを、多くの人たちと分かち合う時間をつくってみませんか？

「いったいどんな絵があるんだろう」と興味をもたれたなら、救援・中部のホームページを見てください。縮小サイズではありますが、全部の絵がそろってあなたをお迎えします！ ひとつひとつの絵をクリックすると、少し大きめにも表示されるようになっています。



ヤドウィーガ・クラスノペローヴァ(14才)
「捨て去られた村」

◆◆◆お願い◆◆◆

送料のみご負担くださいますよう

お願いします。その他、詳細は

お気軽に事務局までお尋ねください。

(展覧会開催のノウハウなどをお伝えし、応援します。)

ホームページはこちら：

<http://www.debug.co.jp/ukraine/>

お問い合わせは…

お電話：052-836-1073

(月・水・金 10:00~17:00)

メール：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp



ターヤ・バラシケーヴィナ(15才)
「チェルノブイリの風」

6月19日(土)のウクライナ講座報告



今回のウクライナ講座は、「ボランティア活動に関わろう」という、意欲に燃えた若者達（十数名）を招待し、名駅前の「中小企業センター」で開催されました。

最初に、救援・中部が14年間続けてきた支援活動について、かんたんな説明を行い、実際に、「キルト作り」に参加していただきました。

今秋、外務省の「草の根支援プログラム」で、27ヶ所の診療所に、医療機器が設置されます。新しく支援先になった診療所の壁に、私達からのキルトのメッセージがかかっているというのは、とても素晴らしいことだと思いませんか？ 皆さんも、来年の春までに一枚作ってみませんか？

以下は、当日参加して下さった皆さんからのメッセージです。

先日は、「地球市民フェスタ中部 2004」の国際協力の事務所訪問ツアーに協力いただき、大変ありがとうございました。とてもよい時間を味わわせていただいて、楽しかったです。参加者の感想を書きます。

- ・この団体を初めて知り、とても新鮮で、感動しました
- ・キルト作りやクリスマスカード作りには、ぜひ参加しようと思います
- ・事故のときの政治体制や背景などを、もっと知りたい
- ・自分のこととしてきちんと受け止め、無理せず活動しているという印象を受けた
- ・ニュースの中での出来事でしたが、今日まで苦しんでいる人が多いことに驚いた
- ・お話がとても興味深かった
- ・チェルノブイリだけでなく、他の核の被害についてももっと知りたくなった

時間が終わってからも、「もっと話しが聞きたい」とか、「紹介された『チェルノブイリの祈り』の本を、早速買いに行きます」と言った参加者がいたりして、これを機会に、参加者の意識が変わっていくのを感じました。私自身も、大変勉強になりました。本当にありがとうございました。

(地球市民フェスタ 2004 実行委員 加藤克也さんより)



あなたもバザーに参加して 「一日ボランティア」を体験してみませんか？

今年のウクライナ講座は、今までボランティアを経験したことのない人、してみたいけれど方法がわからない人、そんな人たちのためのメニューを用意しています。

そして、ボランティアの醍醐味を味わってもらうためには、これが一番！！ というわけで、「今池まつり」のバザーに出展・参加します。

話はかんたん。体ひとつで今池の会場にやってきて、あとは、チェルノブイリ被災者のために心をこめて(?) 声を出せばいいのです。「暑いそして熱い」一日を、私たちと過ごしてみませんか？

ボランティアを心で考えている人、ボランティアを体で感じたい人、どなたでも歓迎です。

また、バザー出展のための準備会(8月21日)も行いますので、こちらの参加もよろしくをお願いします。

いよいよ今年も
夏バザーイベント!



今池まつりのバザー

日時：8月29日(土)・29日(日) 10:00~21:00

(参加は、両日でも、どちらか1日でも、
また、短時間でも構いません。)

場所：名古屋市千種区今池「今池まつり」バザー

(地下鉄「今池」下車徒歩3分
ガスビル 北側広小路通り沿い)

*参加ご希望の方は、8月20日(金)までに事務局
(TEL052-836-1073)までご連絡ください。

バザー準備会<準備会のみ参加もちろんOK>

日時：8月21日(土) 13:00~15:00

場所：救援・中部事務局(地下鉄「杻中」下車
徒歩13分/道に迷ったらTELください。)



バザーへの出展品も同時に募集します

ご家庭で眠っている不要品や手作りの小物など、事務局にお持ちください。遠方の方はお送りいただいても結構です(8月20日(金)必着)。古着はご遠慮ください。皆様のご協力をお待ちしております。

特集 <草の根支援 75,000 US\$ 交付決定! >



慈善基金「チェルノブイリの人質たち」運営委員会の委任により、全日本国民への敬意を込めて。

代表：V.キリチャンスキー

2004年7月12日

*原文はロシア語 訳：竹内高明

チェルノブイリ原発事故の被災者に対する、無償支援の全く新しい事例となったのは、「ジトーミル州内 27ヶ所の『移住者村診療所や准医師・助産婦駐在所』への支援プログラム」の実現であった。それを発案したのは、日本

の団体「チェルノブイリ救援・中部」の運営委員たちであり、プランの具体化にあたったのは、私達「チェルノブイリの人質たち（ホステージ基金）」だった。

移住者の村をしばしば訪問し、そこの医療関係者と話し合っ、私達は、これらの村々の医療施設の設備が、「老朽化していたり、故障していたり、あるいは、そもそも必要な機器が全くなかったりする」ということを知っていた。支援の要請を受けたことも、一度や二度ではなかった。移住者の村である「バラノフカ地区ゼレムリャ」に対する、長期にわたる日本の支援が、州内でよく知られていたことも、その理由の一つである。その後、ジトーミル地区のヴァシリエフカ村も、支援を受けた。しかし、これまで支援を受けたのは2つの村にすぎない。他の25ヶ村はどうなるのか？

だからこそ、2003年2月の「チェルノブイリ救援・中部」代表団から、「日本の外務省が、大使館を通じて行っている『草の根無償支援プログラム』に申請してみないか」と提案された時、私達は喜んで同意したのである。これらの村の人口総数は、3万2千人にのぼり、そのうち4分の1が、チェルノブイリ原発事故の被災者である移住者なのだ。

「チェルノブイリ救援・中部」の運営委員たちは、私達のためにアンケートを作成してくれ、私達はそれを「各診療所、准医師・助産婦駐在所」に配布した。残念ながら、すべての人が支援の性格を理解したわけではなかった。地区病院の中には、これは彼らの病院への支援であると考え、アンケートに、村で必要な機器ではなく、地区病院で必要な機器を記入したところもあった。私達は、これらの地区病院を非難するわけではない。彼らはまず、個々の村の診療所よりも、高度な医療を行っている地区病院の機器を充実させることを、考えたのだから。しかし、すべての施設に支援を行うことは不可能であり、支援は具体的な対象・具体的な村に対して、行わなければならないのである。病院というのは、より広い概念の施設であり、病院についてまず第一に配慮する義務があるのは、国である。「村の診療所、准医師・助産婦駐在所」は、各村の予算に依存しているのであり、村の予算には、医療機器購入費を支出する余裕は、実質上存在しない。職員の給与と、救急用の医薬品代が関の山である。

記入後のアンケートは、日本に送られ分析された。2003年8月、私達は、キエフの日本大使館を訪れて、事前の打ち合わせをし、「草の根無償支援プログラム」による資金提供を申請する書類を、作成・提出した。

2003年10月、日本大使館の職員たちがジトーミル州に来て、移住者の村27ヶ所のすべてを訪問した。そのリーダーは、二等書記官の newName(しんみょう) 薫氏であり、その他、医療問題顧問の

乳井(にゅうい)氏、経済問題担当職員兼通訳のタチヤナ・ハタエヴァ氏も同行していた。そして、厳しい審査が実施された。

私達「チェルノブイリの人質たち」基金は、この間、地元のマスコミに、「草の根無償支援プログラム」の進行状況に関する情報を、逐一提供していた。支援対象となった村の医師たちも、基金を訪れた。支援が実現することを信じない人がいたが、私達は、「日本側が支援を決定した場合には、必ず支援が行われる」と皆を説得した。そしてついに、6月初め、大使館から電話があり、「日本国外務省が、75,000USドルの資金を提供する」という、祝福の言葉をいただいたのである。

2004年6月25日、キエフの日本大使館で、資金提供に関する契約の署名式が行われた。我々の他、オデッサ・ニコラエフカ・キエフの支援対象者が出席していたが、支援額は、私達のプロジェクトが最高であった(他の支援金額は、25,000~40,000 US\$)。契約書に署名をしたのは、在ウクライナ日本大使甘江(あまえ)喜七郎氏と、「チェルノブイリの人質たち」基金代表、キリチャンスキー(さん)である。キリチャンスキーは、我が「ホステージ基金」を通じて、すでに14年間にわたり恒常的に行われている支援に対し、日本国民への感謝の言葉を述べた。(1990年8月、「チェルノブイリ救援・中部」の最初の代表団の訪問があり、最初の人道支援物資がもたらされたのである。)

今回提供される資金は、「診療所や准医師・助産婦駐在所」に欠かせない機器の購入に充てられ、チェルノブイリ被災者への医療サービスの質が、顕著に向上することになる。ウクライナ国民は、一度たりとも、日本国民の誠実さと善意に疑いを抱いたことはなく、その信頼が新たに裏付けられたのである。私達は、この援助に対し、深く頭を垂れ、日本国民・日本政府・「チェルノブイリ救援・中部」に、我が国民への配慮に対し、心から感謝の意を表したい。「チェルノブイリの人質たち」基金の運営委員たちは、このようにすばらしい誠実な友人たちが日本にいることを、誇りに思っている。私達の思いは、筆舌には尽くし難い。だから、感謝の言葉は、ウクライナ語の「ジャークエモ(感謝します)」と、日本語の「アリガトウ」に、とどめておくことにしよう。

「チェルノブイリの人質たち」基金は、医療機器販売業者「メドガラント」社と契約を結んだ。同社は機器を入手し、各村に配達し、設置し、保証をする。契約に従い、この手続きは9月中旬までに完了することになっている。いずれかの診療所に機器が設置されると同時に、日本大使甘江喜七郎氏が、自らジトーミルに来て村を訪れ、機器の受渡し式を行う。その際、大使は記者会見に出席し、州行政の代表者とも、会見する予定である。

「チェルノブイリの人質たち」基金は、州内の新聞用の記事を作成した。支援の授与について、ウクライナの各マスコミ(TV・ラジオ・新聞)により報道が行われた。移住者村の存在する各地区に、新聞発表用の文書と、設置される予定の機器のリストが送付された。各地区の新聞は、すでにこのことを記事にしており、機器リストを公表している。これらの報道は、地域住民の心の中に、日本国民に対する感謝の気持ち呼び起こした。皆口々に、おおよそ以下のようなことを話している。

「チェルノブイリの惨事は、地球規模のもので、多くの人々が私たちに同情し、支援を約束しています。しかし、人々への支援や、チェルノブイリ事故の後遺症の対策に、ほんとうに全力を注いでくれているのは、日本国民だけです。8,000kmの距離にへだてられながらも、私たちの問題を身近に感じ、理解を示してくれている遠方の友人たちに、私たちの深い感謝の気持ちを伝えてください。『苦境に陥って初めて、真の友人がわかる』ということわざがあります。ですから、私たちは十分な根拠を持って、日本人の皆さんを友人と呼ぶのです。真の友人、誠実な友人だと…。」



〈リツィ村診療所〉

竹内さんの日本便り(一時帰国編)

7月6日成田空港に着き、新しいヴィザを取得、人に会って頼まれたものの受け渡しをするなど、用事をこなしながら次第に西へ移動、この原稿は実家の岡山で書いています。今では、私がかつて日本語を教えたウクライナ人女性が3人東京に住んでおり、うち1人は文部科学省の研究生プログラムで日本語教授法の勉強中、たまたま来日中の彼女のお連れ合いをまじえ3人で夜のお台場をモノレールで走りました。同じプログラムで、早稲田大学でEUと日本の関係につき研究している人とは、喫茶店で日本の改憲問題について話し、第3の元教え子にはご自宅でちょうど3ヶ月の娘さんを見せてもらいました(お連れ合いは日本人)。彼女らの東京は、私が学生をしていた80年代前半の東京とは、違う雰囲気のものだと思いますが、しかし20年前とくらべて、今の東京または日本が、根本からの変化をとげているというわけではありません。モノとカネと情報とを大きく素早く動かして、生産活動と暮らしを続けていくという生き方は、20年前の日本ですでに確立していたと思います。それに対する異議申し立ての声も、すでに存在していました。それでは、何が変わったのか？

私の感じだけで言えば、自由というものの輝きが、うすらいできたのじゃないかと思えます。自由というのは、好きなことをするというだけでなく、自分でものを考えるということ、自分のすることに自分で責任を取ることでしょう(最近の「自己責任」論と、私の言いたいこととは別なのですが、詳しく説明する紙面の余裕がありません)。モノとカネの流れに身軽に対応できるようになればなるほど、いちいち自分でものを考える必要性は減ります。そして責任は、なんとなく流れの方に預けているのじゃないでしょうか。いやなことはしない、嫌いなものは使わない、行きたくないところには行かない、という態度



は、日本では、つきあいが悪いとされますが、ウクライナでは「自分の考えがある人」という表現をされるように思います。もちろん、[○]の場合、「自分の考え」という言葉はあまりいい意味では使われていないわけですが、日本では「独自の発想」とか「ユニークな感性」といった言葉自体はプラスのイメージを持っているにもかかわらず、集団でことを決める際に、そういうものが出てくるのは好まれない傾向があるように見えるのはなぜでしょう。まあ、私は、比較文化論に興味があるわけではありません。とにかく、一枚岩で選択肢のない、しかも形のはっきりしない「現在」が日本をおおいつくしているかのような感覚が、感じ方と考え方の不自由を生み出しているような気がします。しかし例えば、私がこれを書いている実家の応接間では、元古文教師の父親の[○]蔵書が書棚にならんでおり、背表紙を見ただけで、過去にいろんな日本があったのだということが思い出され(?)ます。どこに出発点をおくかということは、それぞれの人の自由で、政治家の(あるいは学校の)先生に決めてもらうことではありません。前の戦争の時にも、「死にたくない」と思った日本人だけでなく、「殺したくない」と思った日本人もいたわけです。人を殺さないですむ、人(自然)を犠牲にしないですむ世の中であればと思いますし、そういう世の中の唯一正しい手本がどこかにあるというのではないらしいとみんな感じている今こそ、いろいろな試みが、可能なものじゃないかと思えます。(7月20日)

2004年・夏・伊那・合宿

「恒例」夏の合宿は、お馴染みの伊那で行われた。緑眩しく、木々を渡る風の涼しいこと。身も心もほどけ、安らく。…が、会議はそうはいかない。

ウクライナから帰国した竹内さんの「生」ウクライナ情報から始まった。人々から関心の薄れる存在となり、精神的なケアのシステムも無く見捨てられ、出口無しの状況に置かれているとの事。年金や最低賃金が上がっても、物価が上がり、人々は楽にはならず、市民活動のできる余裕も無い。厳しい状況に置かれた被災者の実態が伝えられた。

その後に行われたのは「NGOプロジェクト評価」。チェル救の実際に行っている2つの事業の、評価に至る「演習」を行った。現地調査を行わなければ、完成しないものではあったが、いくつかの問題点が明らかになり、今後どのような支援をするか、打ち切るかの参考になった。

翌日は、今後の活動方針について、年々減少する救援資金のもと、どのような支援・活動ができるのかについて意見を出し合った。

現地との協議のもと、ゼロベースで今までとは違うプロジェクトを行う。現状を維持するが、やがて集中・打ち切り・自助努力への移行とする。現在行っている支援・活動の見直し、検討を行う。新たな人材確保への試み、活動の模索。現地との関係性の検証。具体的な現在の支援事業のあれこれ…。多岐に及んだ。また、現地主体となる外務省の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の助成制度は今後も被災者支援に活用していこうという事で意見の一致をみた。今後はこの議論を運営委員会で深化させ、来年度の活動を決定していく。 (山盛)

合宿に参加して考えたこと

救援・中部の合宿なるものに、はじめて参加しました。自分なりに意見を出し、短いながらも今まで関わってきた活動を振り返ることができたと思います。まず、「チェルノブイリ原発の事故という悲惨な出来事から始まったウクライナ内外の人々の運命、そしてそれに呼応した日本の心ある人たちが、今までいかに真剣に物事を見つめてきたか、それを知ることが必要だ」ということと、「さらにこれから、我々にできることはあるのか、いったい何をしたら自分たちの思いに決着をつけられるのかを見極めることが大切だ」ということです。

これまでの活動の中でできあがってきた、現地のいくつかの病院との経済的な協力関係を見ても、日本からの支援によって、原発事故で被曝した多くの罪のない人々に薬物治療を施すことができます。それは、経済的に豊かといえないウクライナの状況にとって、日本の支援者の存在がいかに大きいかを示します。そこであらためて考えるべきことは、日本からの金銭的な支援が、果たして本当にかの地の人々に効果的な救いをもたらしているか否か。

たとえば病気に対しても、現実に対応する方法はひとつではありません。患者は薬を摂取すればそれで済むのかといえ、それはあくまでも一時的な処方なのです。人間が健康的に生きていくためには、希望・勇気・愛、そしてユーモアが必要不可欠なのではないでしょうか。

今回の合宿で議論されたことに、愛やユーモアがどれ程含まれていたか、僕は敢えてここで考えたい。救援・中部は、ウクライナの人たちに希望の光をともしようとしてきた。そして、その志は今でも健在なのだろうか。彼我にとって、希望とは何なのだろう。そして、互いの存在が未来に確かな道を拓くことがいかにして可能となるのだろうか。大変抽象的な話になってしまいました。次回は具体的な活動について「あなたと」意見を闘わせたいと思っています。

(石川博仁)

チェルノブイリ原発事故が

18年間にナロジチ地区住民に及ぼした

医学的影響

ナロジチ地区中央病院院長 O.O.テプリツキー



ウクライナ国民の歴史において、恐ろしい悲劇となったチェルノブイリ原発事故から、すでに18年が過ぎました。この事故は、ウクライナの国土のかなりの部分を放射性物質によって汚染しましたが、その中には、ナロジチ地区その他のジトーミル州北部の地区も含まれています。史上最大の、科学技術を原因とした惨事の結果、ナロジチ地区の住民の暮らし・健康・仕事は、事故前と事故後の二つに分断されてしまったかのようです。

被災した住民の保護は、ウクライナの国法「チェルノブイリ惨事の結果被災した国民の地位と社会保障に関する法律」によって求められている、基本的な事柄です。地区行政にとっても、医療関係者にとっても、原発事故の影響を判定し、それを最小限に抑えること、また被災者の医療・保健衛生の保障が、主要な課題となっています。地区の現状を評価し、また住民の罹病率を分析して、私たちは、「住民の健康指標の顕著な悪化は、チェルノブイリ惨事の結果である電離放射線被曝の有害な作用と密接な関係がある」という結論に達しました。

●出生率は、1985年に住民1,000人あたり12.0人でしたが、2003年には8.6人にまで減少しました。死亡率は逆に増大し、1985年に16.7人だったのが、2003年には25.4人になりました。人口動態は、1994年からマイナスに転じ、1985年には+16.8人/(1,000人)、2003年には▲4.7人でした。

もちろん、住民数の減少を考慮に入れなければなりません。1985年の地区人口は25,800人、うち14歳以下の児童は5,200人でしたが、2003年は10,400人、うち児童は1,726人です。2003年に出生率がわずかながら上向いたものの、死亡率は年々顕著に増大しています。2003年の死亡率は、2002年に比べ、2.3人/(1,000人)増えています。死亡原因の第1位は、心臓脈管系の疾患、第2位は腫瘍です。

●当地区住民のすべての疾患の伝播率は、州内で最高の数字を示し続けており、2003年では住民10万人あたり237,711人(2002年には221,067人)です。罹病率は10万人あたり20,700人です。増加しているのは、心臓脈管系・消化器・呼吸器・内分泌系・悪性新生物(特に乳腺・皮膚・女性生殖器)の疾患などです。

●心筋梗塞も顕著に増加しており、州内でも最も多い地区の一つです。1985年に発作例は18件でしたが、2003年には54件でした(1994年は101件)。死亡も増加しており、労働可能年齢[男性16~59歳、女性16~54歳]の人にも起こっています。もちろん、これは放射線の影響ばかりでなく、生活において常に緊張を強いられ、自らの健康や子どもたちの将来に対する不安があるための、神経的・心理的問題も影響しており、住民にとっての脅威となっています。

●一般的に、「住民の健康悪化は、すべてチェルノブイリ原発事故のせいだ」と言い切るのは、不当なことでしょう。マイナスの影響を与える他の要因もあります(エコロジー的・経済的な)。しかし、罹病率や死亡率を分析すれば、「放射線の影響を受けていることが明らかだ」と確信を持つことができます。その裏付けとなるのは、児童の高い罹病率と、登録されている病例の増加で、1985年には、児童411.2人/(1,000人)でしたが、2003年にはすでに975.3人、つまり2倍以上で、現在、児童の75%近くが病気に罹っており、約40%の児童は、2種類以

上の病気を持っています。

●事故後数日ないし数ヶ月の、放射性ヨウ素の作用の結果としては、甲状腺にあらわれた障害に、特に注目しなければなりません。実質上、当地区の住民で、甲状腺に被曝しなかった者は、皆無と行ってよいでしょう。したがって、各人が大きなリスクを抱えているのです。過去数年、甲状腺の障害に関連した病気の、明らかな増加が認められています。

15～16年前には、内分泌系疾患の中で**甲状腺障害の罹病率**が占める割合は15%、糖尿病の罹病率は83%だったのに比べ、現在当地区では、甲状腺障害の罹病率の割合が76.3%、糖尿病は21%にすぎません。甲状腺の障害中、第1位を占めるのは**弥漫性甲状腺腫**(72.3%)、その他**結節性甲状腺腫**(19.4%)、**甲状腺炎**(6.9%)、**甲状腺機能減退症**(7.0%)などです。自己免疫性甲状腺炎(事故前には登録されていない)の当地区での罹病率は、692.3人(/10万人)、州全体では149.7人です。これが、放射性ヨウ素その他の放射性物質の影響であることは、疑いの余地がありません。

●1991年以降、当地区の成人に、**甲状腺の悪性新生物**発生の増加が認められます。事故前の5年間、甲状腺癌の症例は1件しかないのに対し、1991年には8件が、1994年と1997年には、それぞれ2件、児童に**甲状腺癌**が見つかりました。児童の甲状腺癌は、事故前には全く登録がありません。過去13年間で、甲状腺癌は25件登録されています。しかも、主に若年・中年層であり、うち85%近くは女性です。

●**低線量被曝**が人間の身体に与える影響は、現在に至るまで、十分に研究されているとは言えません。主に、汚染された水や食品を通じて**内部被曝**が起こり、それは、当然消化器の状態に影響を与えます。半減期の長い核種(セシウムやストロンチウム)の影響によって、水の放射線分解が起こり、基根が遊離し、それらが結合する過程で有害な代謝物質が生じ、細胞膜が傷つけられ、突然変異が起こります。**免疫機能が低下**している状態で、生体は、医薬品の助けを借りてさえも、ストレスや好ましくない環境条件に対し、充分に対応できません。免疫機能が低下している上、胃腸の病気に罹っている患者では、腫瘍や結核発生のリスクが、顕著に増大しています。

生体の免疫機能が損なわれているため、罹病年齢が若齢化しており(5歳の子どもに潰瘍が発見された記録があります)、病気の経過が長引き、慢性化しやすく、しばしば余病併発があり、一般的な治療法ではなかなか快癒しないのです。

●一時的な労働能力喪失、あるいは**障害者**になるケースが増えています。2003年には、当地区で44人が障害者となり(2002年には63人)、これは成人1万人あたり50.2人に相当します(2002年では72.5人)。うち労働可能年齢の人は19人(2002年には32人)でした。1万人あたりでは20.7人になります。州全体では、2003年の障害者数は人口53.2人(/1万人)であり、前年に比べ0.2%増加しています。当地区で、2003年に障害者資格を得た44人のうち、35人は障害者資格とチェルノブイリ原発事故との因果関係が認められており、これは全体の79.5%を占めます。**チェルノブイリ障害者**になった人のうち、腫瘍関係は19人、血液循環系の障害者は3人、呼吸器関係と内分泌関係の人は13人でした。

また、近年チェルノブイリ関連の社会保障プログラムの予算が、顕著に削減されていること、特に住民に対する医薬品のための予算が、年々減っている(1998年には60万グリヴナ、2003年には18万グリヴナで、この間3分の1に減ったこととなります)、医療関係者は、チェルノブイリ関連の法律に規定されているように、充分な量の医薬品を無料で提供する可能性を奪われています。私たちは、国の困難な財政事情を理解してはいますが、これを人々にどのように説明すればよいのでしょうか？そして、彼らの悲劇に責任があるのは、誰なのでしょう？

事務局便り

夏も盛りですね。しかしながら、事務所は意外と涼しいときもあります。

すべての窓を開けて、風通しを良くすると、心地よいさわやかな風が吹き抜ける。コンクリートに囲まれた灼熱の都会ではなく、すこ～しのどかな住宅街に程近いここでは、まだわずかに自然の恵みが味わえるのであります。

猛暑は、人間さまのせいだという話もあります。利便性に頼るあまり、無くしてきてしまったものは、たくさんあるようですね。さて、9月のウクライナ訪問団が、予想を裏切って大所帯となりそうで、帰国後の報告会が今から待ち遠しいとひそかに考えています。そのまだ見ぬ未来に向けて、雑然とした事務所内を片付け片付け、暑苦しさを感じさせないスピーディーな仕事振りを身に付けようと、汗する日々です。

この夏を乗り切り、実りの秋の訪れとともに、事務局も一皮むけた新たな姿に生まれ変わる！そんな夢を見つつ、今日も変わらぬ我が姿をいかにせむ…と悩むのであります。

(石川)

編集後記

☆韓流に、はまっちゃいました！ 初回を見逃したし、一週間が待てないから、DVDを買っちゃった。…で、台詞と一緒に言えるくらい、繰り返し観ちゃった。挿入曲も気に入ったので、CDも買っちゃった。「秋の童話」も見たいし、次は「ホテルアー」だ。(H)

☆今年の夏は異常に暑い！ 発熱していても気付かないくらいの気温。屋内で寝ていても熱中症になってしまう。身体から汗となって蒸発していく水分は、陽炎のように見えるのだろうか？…自宅で居ながらにして、砂漠を彷徨っているようだ。(美)

☆職場に大阪出身の人が来て半年。ときどき関西弁の発音がうつってしまう。あ～、名古屋人としてのアンデンティティがぐらりとゆらぐ瞬間…。(佳)

☆朝から30度を超えていく夏の盛りの中で、さらに暑いアジアに関する本を読む。

①韓国、中国、東南アジアの国ぐに至る所に日本の戦禍の痕。広島・長崎を忘れないのと同時に、アジアの国ぐにも。

②日本各地で大きな豪雨被害が相次いだ。天気図を見ると、梅雨前線は中国、韓国、日本にまたがり、同じ被害をもたらしている。ニュースでは伝わらないが、やっぱりアジアはつながっている。人々の苦しみに思いを馳せる。(京)

☆7月22日、母が急逝した。母の口ぐせ…「人は誰も、過去を振り返りながら、『あの時』もう少しやっておけば良かったと思う。でも、『あの時』が『今』だということに気付かない。『今』を大切にしなさい！」…『今』まで、そしてたった『今』も、この言葉をかみしめている。産んでくれてありがとう。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473